

核をめぐるアメリカ南西部の

文学——サイモン・J・オーティーズの詩を中心に

松永 京子

一 はじめに

一九四五年七月十六日、ニューメキシコ州のトリニティサイト(現ホワイトサンズ・ミサイル実験場)で世界初の核実験が行われた。アコマ・プエブロ族出身の詩人サイモン・J・オーティーズ(Simon J. Ortiz)は、この歴史的出来事を「奇妙な夜明け」と呼び、「私たちのホームランド、国家の犠牲の地」(“Our Homeland, A National Sacrifice Area”)と題したエッセイのなかで次のように述べている。

「アメリカン・インディアンの人々は、失うことを経験し、それが困難なことも分かっている。けれども、一九四五年の奇妙な夜明けの意味は理解していなかったし、ある意味では、いまでも理解していない。そしてその理由は、アメリカ社会もそれを理解せず、それに向き合うことを拒絶しているからだ。(私たちのホームランド) 三三三頁」^①

オーティーズも指摘しているように、アメリカ社会において「奇妙な夜明け」の意味は長い間曖昧なままになされてきた。けれども、アメリカ南西部の歴史に注目したとき、核と先住民部族の密接な関係は明らかである。世界初の核実験がメスカレロ・アパッチ族居留地からさほど離れていないトリニティサイトで行われた一九四〇年代、ナヴァアホ族やプエブロ族の土地にはウラニウム鉱山や製錬所が開かれた。そしてオーティーズ自身がウラニウム鉱山や製錬所で働いたように、アコマ・プエブロやラグーナ・プエブロの部族員の多くが、アメリカ南西部の核産業に関わることとなった。

オーティーズが「奇妙な夜明け」と呼んだ世界初の原子爆弾は、冷戦時代の核競争の文脈におけるニュークリアリズム、すなわち「国家の安全を名目に核兵器を擁護する思想」を極めてはつきりとした形で示した歴史的指標であったといえる。しかしオーティーズはこの「奇妙な夜明け」を、単に冷戦時代の象徴的出来事として理解しただけでなく、より大きな歴史的枠組みから捉え直し、いまだ続くアメリカ合衆国における植民地主義の問題に結びつけた。

ロスアラモスの研究所をいまある場所に建設することや、原子爆弾をどこに落とすかといった決断は、決して例外的なものではなかった。結局ここは「遠い不毛の西部」で、少人数のインディアンしか住んでいないからだだった。結果、ウラニウムは南西部のフオーコーナース・エリアの、インディアン土地やその近くで「発見」されることとなった。(私たちのホームランド) 三五四頁)

オーティーズが示唆しているように、ウラニウムの「発見」は、先住民の土地や主権を剥奪するシステムを生み出してきた植民地主義の歴史と無縁ではない。アメリカが「新大陸」としてコロンプスに「発見」されたように、ウラニウムは先住民の居住するアメリカ南西部で「発見」された。そしてこれらの「発見」は、すでに存在していた先住民族を「抹消」し、この土地を「未開の地」や「不毛の地」とみなす行為からはじまった。

本稿は、オーティーズの詩集『ファイトバック―人々のために、土地のために』(Fight Back: For the Sake of the People, For the Sake of the Land 一九八〇年)に収録された詩や散文を中心に、アメリカ南西部における核と植民地主義の問題を取り上げる。^⑤特に、アメリカ合衆国の植民地主義政策と冷戦時代の核表象に共通したアポカリプスの概念に注目し、オーティーズがいかにアポカリプスの概念を転覆しようと試みているのかについて考察してみたいと思う。

二. 〈世界の終わり〉と〈消えゆくアメリカ人〉のレトリック

ヴェトナム戦争の背景にあった冷戦は、アメリカ政府や軍がアメリカの生活を保護するための手段として正当化してきた核兵器の増強によって定義づけられているといっても過言ではない。そして冷戦のレトリックにしばしばみられる核兵器や核戦争に対する恐れや懸念の多くは、核戦争が起これば地球の壊滅や〈世界の終わり〉がもたらされるといふ終末論的な前提に基づいたもので

あった。一九八四年、『ダイアクリティックス』誌の「核批評」特集に掲載された論文「ノー・アポカリプス、ノット・ナウ」(No Apocalypse, Not Now...)のなかで、ジャック・デリダは次のように述べている。

核兵器は、過去のいかなる兵器よりも、情報とコミュニケーションの構造、声に出さないものも含めた言語の構造、記号やグラフィックな記号解読の構造といったものに従属しているように思える。だが、この事象もまた極めてテクスト的なので、当面のところ、核戦争は起こったことがないし、我々はそれについて話したり、書いたりすることができるだけだ。

(デリダ 二二三頁)^⑥

デリダが「核戦争は起こったことがない」「我々はそれについて話したり、書いたりすることができるだけだ」と述べているように、ニューヨークリア・エポック(核時代)は「いまだ起こったことのない核戦争」をめぐる文学的想像力の時代でもあった。ウォルター・ミラーの『黙示録三二七四年』(一九五九年)やカート・ヴオネガットの『猫のゆりかご』(一九六三年)といったサイエンス・フィクションから、ティム・オブライアンの『ニューヨークリア・エイジ』(一九七九年)といった作品まで、一九四五年以降の核をめぐる作品の多くは様々な形の終末を予想し、あるいは終末への不安を描いてきた。デリダの理論に基づいていえば、「核の不安」や「終末の不安」を描いたこれらの文学作品は、「核戦争」が起こっていないからこそ存在するといえる。

人間の記憶の中でほとんど同じ種類と見なされる戦争に続いてきた他の全ての戦争とは違って、核戦争には前例がない。それ自体は、これまで起こったことがない、非出来事である。一九四五年にアメリカが落とした爆弾は、「伝統的な」、従来の戦争を終結したのであって、核戦争を始めたわけではない。核紛争の恐ろしい現実とは、一つのデイスコースやテクストの記号の指示対象にすぎず、(現実であれ過去であれ)決して現実の指示対象ではない。(デリダ 二三頁)

引用のなかでデリダは、いまだ起こっていない「核戦争」と現在進行形の「核時代」とを区別し、一九四五年にアメリカが落とした爆弾は既存の戦争の形に終止符を打ちかけたものの、「核戦争」ではなかったと宣言する。なぜなら、デリダにとつての「核戦争」は、二つの超大国による全面核戦争であり、それが起これば死を悲しむ人間も、文学も、アポカリプスという概念そのものでさえも殲滅してしまう「取り返しのつかない破壊の可能性、すなわち文学の批評の基礎の完全なる破壊」(デリダ 二六)を意味していたからである。このようなデリダの論説は、核時代の文学の多くが「核戦争はいまだ起こっていない」ことを前提に書かれていることを示唆するだけでなく、レトリックそのものを解体しうる「核戦争」を言語や記号学の領域から論じうることを可能にした。しかし「核戦争」は起こっていないといえるデリダの前提は、「核戦争」を「架空」のものとしてではなく、実際に起こった過去の現実、あるいは再度起こりうる未来の現実として捉えてきた文学

を、その理論の枠組みの外側に置いてしまう結果にもなってしまう。日本文学研究者であるジョン・W・トリートは、デリダのポスト構造主義的試みを評価しながらも、彼の理論が広島や長崎の歴史的事実を希薄化してしまっていることを指摘している。

デリダのいうことは、少なくともある意味では、正しい。確かに、全体としての核戦争は起きていない。しかし、一つの核戦争が一九四五年の八月に起きていること、このことを認めずに「核」時代の理論を提出することは、不必要かつ懐疑的な理論を作ることである(アメリカが本当の核戦争は自分たちに責任のあるつい最近の歴史的犯罪ではなく、SF文学の中にのみあり、想像される未来のみを脅かすものであるという「核批評」を創ったことは、果たして偶然と言えるだろうか?)。何故なら、核戦争が既に生じたことを事実として承認することがなければ、それは絶対に起きようがないと信じるようになるかもしれないからである。(トリート 四四二頁)⁽⁴⁾

確かにデリダは同じ論文のなかで、「核兵器、そしてあらゆる場所で核兵器を蓄え利用してきた恐ろしい破壊の威力の「現実」を、誰が見逃すことができるだろうか」(二三)と述べているように、括弧付きではあるが、核兵器の脅威の「現実」に言及することを忘れてはいない。けれどもトリートが「核批評は、そもそも、核兵器を唯一使用した国に集まった批評家による対談である」(四四)と述べているように、デリダの論文に代表される「核批評」は、実際に核兵器が使用された側の視点を含まない限定的なもの

として出発していたことも事実だった。すなわち、「核戦争は起こっていない」、あるいは「核戦争が終末をもたらす」というシナリオは、核兵器の使用や製造過程においてすでに全世界で多くの人々が、環境的、社会的、文化的影響を受けてきた事実を不可視化する危険性も孕んでいたといえる。

アポカリプスを（終焉）あるいは（世界の終わり）と定義づけるのであれば、アメリカ合衆国における植民地主義政策もまた、極めてアポカリプス的であったといえる。というのも、「新大陸」の発見以降の植民地主義のパラダイムは常に、先住民が「消えゆく」存在であることを前提としていたからである。例えば、一八七二年に発表されたジョン・ギャストの「アメリカの進歩」は、（明白なる使命）としてアメリカ西部への領土拡張を正当化して描くと同時に、バッファローや先住民を「進歩」との共存が不可能な「消えゆく」対象として描いた（図1参照）。この（消えゆくアメリカ人）という先住民のイメージは、『ダンス・ウィズ・ウルブズ』（一九九〇年）や『モヒカン族の最後』（一九九二年）といった二〇世紀以降の映像作品のなかでも繰り返し用いられるモチーフとなっている。

前述したエッセイ「私たちのホームランド」のなかでオーティーズは、このようなアポカリプスの傾向を持った植民地主義の歴史を、アメリカ中西部の歴史に置き換えて提示する。十六世紀以降、武力と宗教的迫害によってアメリカ中西部を侵略したスペイン植民者は、プエブロ族の生活に不可欠な川の水を乱用し、一方的な土地利用のシステムを部族民に押し付けた。植民者による搾取と干ばつに耐えられなくなったプエブロ族の人々は、一六八〇年、ついに反乱を起こす。この反乱は（プエブロの反乱）と呼ば



ジョン・ギャスト「アメリカの進歩」(American Progress, 1872)

農業労働者、ハンター、坑夫といった開拓者が手前に描かれ、「進歩」を象徴した白い布を纏った女性を中心に、右側には鉄道や電信柱、左側には次第に濃くなる背景に消えていく形でバッファローと先住民が置かれている。

れ、ナヴァホ族やアパッチ族の子孫、メキシコ人や奴隷としてアメリカからアメリカに連れてこられた人々の子孫など様々な部族や民族が結束した大規模なものとなった。しかし十九世紀末、アメリカ政府による西部開拓によって、アメリカ中西部はふたたび植民地下に置かれることとなる。一八八〇年から一九二〇年、疫病、飢饉、そしてアメリカ政府による土地の略奪によって先住民の人口が劇的に減少したのち、鉄道やダム建設によって先住

民族の土地、文化、そして経済システムは破壊され続けた。そして一九五〇年代、アメリカ政府は「国家の安全」を名目に、アメリカ南西部における核の植民地化を押し進めつつあった（私たちがホームランド」三四一―三四四、三四七―三四八頁）。

詩集『ファイトバック』は、十六世紀以降アメリカ南西部で繰り返されてきた抑圧の歴史に注目し、先住民がいかに「国家の犠牲」となってきたのかについて語る。けれどもオーティーズは、先住民を「犠牲者」として提示するだけに終わってはならない。重要な歴史的出来事としていまでもプエブロ族の人々に記憶されている一六八〇年のプエブロの反乱は、オーティーズの詩集のインスピレーションであると同時に、プエブロ族の抵抗の遺産として受け継がれている。以下、『ファイトバック』から詩を三編紹介し、オーティーズの詩がどのように核の植民地化の問題をとりあげ、終末論的想像力に対抗するナラティブを形成しているのかをみていきたい。

三. 「最下坑から始める」 (“Starting at the Bottom”)

一九六〇年、高校を卒業したばかりの十九歳のオーティーズは、アコマ・プエブロ居留地の近くに開かれたアンブロシアレイクのウラニウム鉱山と製錬所で、約一年間働くこととなった。『ファイトバック』はこのときの経験をもとに書かれた詩集である。本詩集には、前述した散文「私たちのホームランド」と十九編の詩が収められ、五〇年代半ばにアンブロシアレイクとラグーナの土地でウラニウムが「発見」された後、いかにプエブロ族の土地が奪われ、先住民が安価な労働力として利用され、近代資本主義社会

に組み込まれていったかを描いている。特に詩編「最下坑からは始める」は、ウラニウム鉱山で働くこととなったラグーナやプエブロの坑夫の状況を描きながら、植民地主義によつて部族の経済システムが崩壊し、先住民部族の土地や人々が新たな経済システム（底辺）に置かれてきた事実を露呈している。

実をいうと

我々のほとんどがよく分かっていなかった

とりあえず

労働組合については

仕事は仕事

ひとつでもあれば幸い

もしあればの話だけれど

実をいうと

会社も 労働組合も

それほど気にしちやいなかった

たとえどちらもが

我々の土地で働いていたとしても

ラグーナとアコマの土地に

鉱山が開かれたとき

男たちと彼らの家族は喜んだ

それというの

男たちは出かけなくてもよくなるから

働くために遠くまで

バーストウの鉄道や

リッチモンド、フラッグスタッフ、ニードルズへ

あるいはピートやタマネギを収穫しに

アイダホ、ユタ、コロラドへ

あるいはマーモン家で働くために

ブルーウォーター溪谷へ

稼ぎとして人參やジャガイモをもらうために

ジャックパイル鉱山が開かれたとき

ラグーナの土地では 何とかやっていくラグーナの男たちも
いた

最下坑で

最下坑からはじめなきやならない 人事課の人はいった

研修期間中は そして上へあがっていくんだ

アコマの男はアンプロシアレイクの鉱山へ行き

いつも身動きがとれなくなった 空白を前に

以前の坑夫の経験を書く

申請書の欄の前に

けれども鉱山担当者は説明した

最下坑からはじめなきやならない

そして上へあがっていくんだ

そして いまでは三〇年近くたち

アコマの男たちは

アンプロシアレイクの地下鉱山の

最下坑で

ラグーナの男たちは

ジャックパイル露天掘り鉱山の一番下で

経験を積みつつ いまだ研修中

ゆっくりと上へあがりながら

そして週末 町の刑務所は

いまだ満員

(オーティーズ 二九七―二九八頁) ⑤

オーティーズが示唆しているように、ウラニウム鉱山はラグーナ・プエブロやアコマ・プエブロの人々に仕事を与えた。貧しい居留地においては、ウラニウム鉱山で働くか、あるいは「リッチモンド、フラッグスタッフ、ニードルズ」といった遠くの街に出稼ぎに行く以外に、仕事の選択肢はほとんど存在しなかったからである。『フアイトバック』の序文でオーティーズは、サンタフェ鉄道で働いた父親とウラニウム鉱山で働いた自分を重ねながら繰り返されてきた抑圧の歴史に注目しているが、二〇世紀以降、先住民部族が引き継いできたこのような部族の社会経済状況は、植民地主義の負の遺産でもあった。

ウラニウム鉱山や製錬所での仕事は、これまでの出稼ぎの仕事と同様に、あるいはそれ以上に、劣悪で危険な仕事だった。『フアイトバック』に収められた詩編「レイの話」(“Ray’s Story”)のなかで、マスコギー族のレイシーが製錬所の粉碎機に巻き込まれ命を落としたように、また五〇年代の先住民坑夫の多くがその

危険性を知らされず素手でウラン鉱石を取り扱っていたように、鉱山や製錬所で仕事を果たした先住民は常に死と隣り合わせで働いていた。⁶⁾ しかも詩のなかで指摘されているように、ウラニウム鉱山で働く以前に坑夫として働いた経験のなかったブエロ族の坑夫たちの多くは、最も危険な「最下坑」に配置された。アメリカの植民地政策によって社会の底辺に置かれてきた先住民は、鉱山においても同様に「底辺」に置かれてきたのである。そして皮肉にも、「最下坑からはじめる」ことは「最下坑にとどまる」ことを意味していた。

「最下坑からはじめる」は、「そして週末 町の刑務所はまだ満員」という一行で締めくくられるが、一見無関係に思われるウラニウム鉱山と刑務所は、実はアメリカ南西部の植民地政策という接点を持つ。オーティーズは詩編「インディアンは本当に便利だった」(“Indians Sure Came in Handy”)のなかで、一九六一年のストライキの際、刑務所に大勢いる先住民囚人が、この鉱山がインディアンを雇っているかを教えられ、鉱山で働くよう取り計らわれたため、ストライキが不成功に終わった出来事を取り上げている。⁷⁾ このように先住民は「スト破り」としても核産業を支えてきたわけだが、そもそも「被抑圧者」である多くの先住民を「犯罪者」へと仕立て上げてきた社会構造を植民地主義の副産物と見なすとするれば、アメリカ南西部の核産業があらゆる形の植民地主義政策によって成り立っていることがおのずとみえてくるだろう。

四、「ものチキンと爆弾」(“Stuff: Chickens and Bombs”)

オーティーズは、植民地主義的ヒエラルキーにおいて人種的マインリティーが常に底辺に置かれていることを描く一方で、核の植民地主義が全てのアメリカ人、特に労働者階級のブアホワイトにも大きな影響を与えていることも見逃さない。環境活動家として知られるウエズ・ジャクソン(Wes Jackson)は、もともと植民者は「余剰人口」として扱われてきた「レッドスキン(軽蔑的な意味でのアメリカン・インディアン)」の征服者であつたけれども、いまではコロンブスやカナドといった植民者の子孫たちも「余剰人口」として扱われる社会へと移行したと指摘している(四一十六)。⁸⁾ 核の植民地化の下では、先住民も白人労働者階級も、ウラニウム鉱山や製錬所で働くことでみな、核産業システムを支える「協力者」であると同時に、「余剰人口」あるいは「被植民者」的存在となってしまう。このことを語り手(＝オーティーズ)とブアホワイトの間のささやかな言葉のやりとりによって仄めかした作品が「ものチキンと爆弾」である。

アーカンソー出身のワイリーと

何度か一緒に働いた

イエローケーキで⁹⁾

普段ワイリーはスクラップ置場で働き
スクラップを仕分けた 会社がそれを
売ったり再利用したりできるように

普段私は粉砕場で働いた
そこではウラニウムといえるものは
石と原鉱にすぎない

イエローケーキで

私たちは加工されたものをバックした
黄色い粉を

五十五ガロンのドラム缶に入れて
トラックが待っているところまで

転がしていった
それがどこにいくのか分からないままに

一度

何か知っているような気になって
ワイリーに言ってみた

政府はイエローケーキを
爆弾のために使っていると

原子炉や実験のために使っていると

ワイリーは私の顔をしばらくじっとみつめ
地面につばをはいて

言った「一度、鶏肉工場で
働いたことがある

毛をむしり取って鶏を加工した
みんなが食べられるようにね

それ以外にどうすることができるのか
なんて知るもんか」

(オーティーズ 三二〇―三二二頁) (10)

語り手は、イエローケーキで働いていたときに、アーカンソー出身の白人男性ワイリーとかわした会話を振り返る。若くて「ナイーブ」な語り手は、恐らく、年上のワイリーに、政府はイエローケーキを原子爆弾や原子炉や核実験のために使っているのだという知識を披露する。ワイリーも恐らく、そのことを知っているのだが、直接それには答えない。そのかわりに、かつて鶏肉工場で働いていたことを語り手に伝える。加工され、ドラム缶に入れられ、トラックで運ばれていく「黄色い粉」は、ワイリーによって、工場で加工され、市場へと運ばれていく「チキン」に置き換えられる。ワイリーが示唆するように、これらの作業は資本主義社会においてはほぼ同じプロセスを経るもので、どちらも労働者が「生きる」ために必要な仕事であるといってもよい。しかし一方で、二人の会話のやりとりは、イエローケーキでの彼らの仕事が本当に「生きる」ためなのかという疑問を読者に投げかける。

「黄色い粉」と「チキン」——この二つの「もの」は、最終的にどこに運ばれ、どのように使用されるかという点において大きな違いを持つ。読者、語り手、そしてワイリーにも明らかのように、前者は食品として人々の口に運ばれ、そして後者は土地や人間の生命を脅かす「爆弾」や「原子炉」や「実験」のために使われる。けれどもワイリーはあえて、自分たちの加工したものがどこへ運ばれ、何に使用されるのかを問わない。そして、それを問うこと

は恐らく、(ワイリーも、そしてオーティーズもはつきりとは述べていないものの)、イエローキーで労働者が「生きる」ために行う仕事が「死」と深く関わっているというアイロニーを認めることであり、先住民同様にプアホワイトもまた、核の植民地主義における「共犯者」であり「犠牲者」であることを認めることでもあった。語り手とワイリーの交わす言葉は少ない。しかしその控えめな表現に含まれた意味は小さくない。「チキン」と「爆弾」の違いのように。

五. 「私のこゝたさ(What I Mean)」

「ものーチキンと爆弾」では、ジェノサイド的核産業の「共犯者」であるとともに「犠牲者」でもあるという運命共同体を分かち合う語り手とワイリーが、人種や年齢の違いを超えて結びつけられる。このようにオーティーズは、しばしば違ったバックグラウンドを持つ人々が、核の植民地支配を受けるアメリカ南西部に集結し、ウラニウム鉱山や製錬所で働くことで繋がっていく様子を描く。オーティーズが共感を示すのは、オクラホマやテキサスからやってきたプアホワイトだけではない。オーティーズはしばしば、メキシコからのヒスパニック系、アフリカ系、混血、そして他の先住民部族の人々との触れ合いを詩に描き、彼ら／彼女らが違った文化的歴史的背景を持ちながらも、アメリカ社会において長い間抑圧を受けてきたという点においてプエブロ族と同じ境遇にあることを示す。そして抑圧されてきた人々の連帯が、核の植民地主義に対抗する力へと拡大されていくことを予測する。この

ようなオーティーズの想いが反映されている詩の一つが「私のいたいこと」である。この詩のなかでオーティーズは、十九歳でこの世を去ったアコマ・プエブロ族のメンバー、エイジーについて語る。

エイジー あのエイジーではなくて
地元のエイジー

私たちの一人にすぎないけれど 彼はヒーロー
大げさに言っているのではなくて 本当の意味で
彼は私たちの仲間だったから

彼は若くて

十九歳を超えることはなかった
同い年だったけれど 学校では

彼はいつも学年が下だった

先生たちはいつも彼を叱っていた

彼の素行がよくないと

エイジーはいつも笑って遊びまわり

インディアンを言葉で話した

(そんなことはしてはいけなかった)

英語をインディアン言葉のように話した

(そんなこともしてはいけなかった)

英語は英語でなくてはいいなかった

それが正しいアメリカのやり方

そして インディアンはインディアンにすぎない――

先生は私たちにそういったも同然だった

エイジーは中学で学校をやめて

鉱山で働き始めた

働かないといけなかったのは 家族が貧しかったから

私たちみんな 家族が貧しかったように

彼は地元から鉱山に働きに出かけた最初のグループのひとり
で

たぶん一番若かった

高校を卒業して私が

アンブロシアレイクのカーマック製錬所で働きはじめたとき

彼はヘイスタックの地下鉱山で働いていた

おもしろいのは――

つまりこういうことだ 学校の先生たちは

いつも彼を叱っていた

彼が読めなかったから

(あるいは読もうとしなかった)

彼が英語を話せないから

(あるいは話そうとしなかった)

でも一度 グランドマズ・カフェに行ったとき

それはミラノにあつて 他の男たちと相乗りして

時々弁当を取りに立ち寄った場所なのだが

私は驚いた

グランドマズはいつも混んでいた

坑夫や製錬所の労働者たちで

でも私たちインディアンのおかげでそこに行く人は

ほとんどいない そこにエイジーがいた

そして彼は話していた つまり話していたのだ

たいしたことには聞こえないかもしれない

でも私がいいたいのはこういうことだ

私たちはあまり話そうとしなかった

インディアンはそんなものだという人もいる

シャイで控えめで礼儀正しいと

でもそんなものほとんどが嘘っぱちだ ほとんどの場合

私たちはただ怯えているだけで

口を閉じているだけなのだ

つまり グランツとミランと鉱山は

ヘイサックとアンブロシアレイクの間にあるのだけれど

そこはかつてすべてがインディアンの土地――

アコマの土地――だった しかし政府によって

測量され 盗まれた

世紀の変わり目に

そしていいたいことはたくさんあつたけれど

私たちは黙っていた

つまり 町でインディアンであることは

決して安全なことではなかった

だから私たちは多くを語らなかつたし

とんでもないことだった グランドマズ・カフェで

インディアンを笑いのネタにしたり

インディアンをチーフと呼んだりする白人坑夫たちと
言い争うなんて

つまり エイジーは 話していた

そして彼は読んでくれた

労働組合の契約を

それが言い争いのもとだった

ちょうど一九六一年のストライキの前で

インディアン労働者は少なかったし

いてもほとんどが あまり理解していなかった

鉱山の組合について そしてエイジーは

地元からの最初のメンバーのひとりとして

ストライキを主張していた

前にもいったように 私たちのほとんどは

何に関しても多くを語らなかつた

仕事があるだけでも嬉しかったから

組合があるうとなかろうと でもエイジーは

後に労働者がストライキを始めると

私たちのために語ってくれた インディアンも

他の労働者と全く同じなのだ

そして彼はシャイでも控えめでもなく

英語を使つてそう語つた

オーキー メキシカン インディアンのような英語で⁽¹¹⁾

その後

エイジーはシルバースティーへ向かつた

労働者によるストライキが始まつたからだ

彼はいつもそんなことをしていた

みんなを助けていた とくにお年寄りを

それが誰であつても構わずに

さて その場所で ある晩

彼はタイヤを交換していた

あるいはエンストした車が何かを押していた

そのとき 偶然 衝突された――

地元の人々にはそのように伝えられた

それは本当かもしれないし もしかしたら

エイジーが

単なる労働者で

単なるインディアンだつたからかもしれない

彼らにはその他のことを

私たちに伝える必要はなかつた

でも私がいいたいのはこういうことだ

エイジーは年端もいかに死んでしまつたけれど

鉱山はまだそこにあつた

労働者はまだ闘い続けていた

お年寄りはまだ助けが必要だつた

そして私たちの闘争の言葉は

インディアンのヒーロー物語のように聞こえるし

読むこと

もできる

オーキー ケイジャン ブラック メキシカンのヒーロー物語
のように――⁽¹²⁾
それが私たちのいいたいことだ
それが私たちのいいたいことだ

(オーティーズ 三二六―三二九頁)⁽¹³⁾

「ヒーロー」として紹介される「地元のエイジー」は、典型的なヒーローの型には収まらない。同い年の語り手(＝オーティーズ)よりも学年が低く、いつも先生から叱られるエイジーは、学校ではいわゆる「劣等生」として扱われてきた。しかし、この「劣等生」というレッテルは、極めて植民地主義的なものでもあった。

「英語は英語でなくてはいけない」「インディアンはインディアンにすぎない」といった教師の態度は、部族の言語と文化を否定し、アメリカ先住民に同化を迫る植民地政策が、教育機関においても深く浸透していた事実を露呈する。だが一方でオーティーズは、エイジーが意図的に「劣等生」として振る舞っていたことを示唆している。括弧で括られる「(あるいは読もうとしなかった)」「(あるいは話そうとしなかった)」という部分にあるように、実はエイジーはこのとき既に、先住民文化を抹消しようとする学校教育の本質を嗅ぎ取り、そのようなシステムに対して彼なりの抵抗を示していたのかもしれないのだ。

このような植民地主義的教育制度を抜け出すべく、エイジーは中学を中退し、ウラニウム鉱山で働きはじめる。エイジーがカーマック製錬所で働いたのは、オーティーズや他の居留地の人々が

そうであったように、家庭が貧しかったためであった。だがエイジーは、ある点において、アコマの他の人々とは異なっていた。彼は、地元の人々がほとんど行くことのないグランドマズ・カフエに行き、白人坑夫や製錬所の労働者たちと「話して」いたのである。

オーティーズが指摘しているように、先住民にとつて白人中心社会で「話す」という行為は決して簡単なことではない。オーティーズは「シャイで控えて礼儀正しい」という先住民に対するイメージは、先住民があまり「話す」ことがないために作られたステレオタイプであると述べ、このようなステレオタイプのほとんどが「嘘」で、先住民が白人と話をしないのは「ただ怯えているだけ」だと語る。先住民が「話す」という行為は、白人に抵抗する行為にも等しく、大きなリスクを背負ったものでもあった。このように先住民に不利な社会システムのなかで、エイジーは自ら、白人労働者の集まりに飛び込んでいく。そして植民者の言葉(＝英語)で書かれた労働組合の契約書を読み、白人坑夫のストライキに参加し、先住民の権利を訴える。「シャイでも控えてもなく」「オーキー メキシカン インディアンのような英語」で、地元の人々の、あるいは先住民のスポークスパーソンとして。

だがエイジーは十九歳という若さで死んでしまう。地元の人々には「彼はタイヤを交換していた／あるいはエンストした車か何かを押していた／そのとき 偶然 衝突された」と伝えられるが、それが実際に起こったことなのかどうかは分からない。オーティーズは、エイジーが「単なる労働者」で「単なるインディアン」だったために、その以外のことには教えられなかったのかもしれない

いと述べ、エイジの死がもしかしたら事故ではなかった可能性を喚起してもいい。

エイジの死に示唆されるように、アコマのコミュニティーに属さない人々にとつて、エイジの死は取るに足らないもの、あるいは彼の存在はもしかしたら「脅威」でもあった。一方で、地元においてエイジは、同胞であると同時に部族的シンボルでもある。というのも、彼の闘争は、これまでずっと続いてきた住民の闘争そのものを体現していたからである。「鉱山はまだそこにあった／労働者はまだ闘い続けていた／お年寄りはまだ助けが必要だった」とあるように、エイジの闘いは終わっていない。先住民コミュニティーではいまだ、エイジのような「ヒーロー」が求められているのである。

植民地主義的ヘゲモニーに対するエイジの闘いは、「私たちの闘争の言葉は／インディアンのヒーロー物語のように聞こえるし」読むこともできる／オーキー ケイジャン ブラック メキシカンのヒーロー物語のように」とあるように、すべての人々の闘争へと拡大されていく。そしてオーティーズはこの闘いにおいて、とりわけ「話す」行為が有効であることを強調する。これは詩の最後で「それが私たちのいいことだ」というフレーズが繰り返されていくように、「語ること」や「話すこと」の主体が、「私」という単数形から「私たち」という複数形へと移行している点にも伺うことができるだろう。エイジが身をもって実現を試みた人種を超えた労働者の連携は、先住民やアホワイトや黒人やメキシコ人や混血を抑制してきた社会システムそのものを変革しようとする力であり、核の植民地主義の勢力を転覆しようとする力である。

もあつた。そしてオーティーズの詩もまた、エイジの抵抗の言葉を引き継いでいる。彼らの言葉はまさに部族全体の、あるいは搾取されてきた人々全体の抵抗や闘いの物語を築き上げているといえるだろう。

六. アポカリプスから抵抗とサバイバルのナラティブへ

オーティーズは詩集『ファイトバック』のなかで一貫して、ニユークリアリズムや植民地主義が、先住民コミュニティーや土地にもたらしてきたアポカリプス的な破壊力や影響を描いている。また植民地主義の終末論的ナラティブが、核兵器による破壊と同様、強力なナラティブであることも認めている。しかしながらオーティーズの作品は、このようなナラティブにひるむことなく、その破壊的でアポカリプス的な性質に対抗する抵抗とサバイバルのナラティブを提示する。人類を（世界の終わりへ）と引き込もうとする力が存在するかぎり、オーティーズの闘いは続く。けれどもこの闘いがオーティーズ一人によつてなされているのではないことは、エイジのように言葉を武器に闘ってきた多くの人々の仕事によつて明らかである。現代先住民作家かつ先住民文学研究者であるオセージ族のロバート・アレン・ウォーリア (Robert Allen Warrior) は次のように述べている。

いかなることがあろうとも、我々は生き延びてきたし、生き延びることができる——我々が生き延びないようにと多くの人々が最大限の努力を払ってきたにもかかわらず、そしてし

ばしば自分たち自身も気づかないままに。現在の我々の闘いは、生き続けること、そして生き続けることを優先する必要性を、コミュニティ内でより責任を持った平和な生き方や、常に変わり続けながらも、変わらず私たちのホームであり続ける風景に置き換えることができる時代に向けて努力することである。(ウオーリア 一二六)⁽⁴⁾

〈核のアポカリプス〉や〈消えゆくアメリカ人〉といった終末論的想像力やレトリックは、被植民者のサブバイバルを脅かす植民地主義的勢力によってしばしば利用されてきた。その一方で、生き残ってきた人々は、「語る」ことでこのようなナラティヴが自分たちには当てはまらないことを繰り返し証明してきた。オーテイズの『フアイトバック』は、まさにこのような証明の一つであるといえるだろう。

注

- 1 Simon J. Ortiz. "Our Homeland, A National Sacrifice Area." *Woven Stone*. (Tucson: U of Arizona P, 1992), 337-363. 以下、本稿における英文引用の邦訳は、ジョン・W・トリートの邦訳以外はすべて松永によろ。
- 2 『フアイトバック』は詩集『編まれた石』(*Woven Stone*)の第三部として編纂されたものを本論では使用している。本文のオーテイズの詩や散文は全て『編まれた石』から引用している。
- 3 Jacques Derrida. "No Apocalypse, Not Now (full speed ahead, seven missiles, seven misses)." *Diacritics* 14.2 (1984), 20-31.

4 ジョン・W・トリート著 「海外寄稿―核批評としての『HIROSHIMA』」(ジョン・W・トリート、川上千代子共訳) 小田実『HIROSHIMA』(講談社文芸文庫、一九八一年)四四〇―四四七頁。

5 Ortiz. "Starting at the Bottom." 297-298.

6 Ortiz. "Ray's Story." 299.

7 Ortiz. "Indians Sure Came in Handy." 296-297.

8 Wes Jackson. *Becoming Native to This Place*. (Washington, D.C.: Counterpoint, 1994), 14-16.

9 「ものーチキンと爆弾」では、「イエローケーキは二通りの意味をもつ。通常、イエローケーキは、ウラン鉱石から抽出された黄色い粉のような精製ウランを指すが、この詩のなかでは、「ウラン鉱石を製錬する場所」という意味でも使われている。

10 Ortiz. "Stuff: Chicken and Bombs." 320-321.

11 主にオクラホマ出身の移動農業労働者のことを指す。

12 ここでは白人、「インディアン」、黒人の混血を指している。

13 Ortiz. "What I Mean." 326-329.

14 Warrior, Robert Allen. *Tribal Secret: Recovering American Indian Intellectual Traditions*. (Minneapolis: U of Minnesota, 1995), 126.

付記

本稿は第三十九回原爆文学研究会(二〇一二年七月八日、於広島大学東千田キャンパス)のワークショップ「北米文学における核の表象について」で発表した内容に加筆・修正を施したものである。またJSPS科研費(課題番号: 23820041)の助成を受けた研究の一部である。